田原坂

年刊
Tabaruzaka
Vol. 3

警視抜刀隊の気魄

一八〇センチ 剣付鉄砲 VS 八〇センチ 日本刀

刀ノ力

西南戦争 魂の響き

黒瞳白面、肥後の若鷹
戦場を駆け抜けた少年達

山に屍 河に血流る

肥薩の天地 秋淋し

新しく生きよう。
NEO ONE KUMAMOTO

SEINAN SIVIL WAR　POWER OF JAPANESE SWORD

西南戦争

刀ノ力

～日本刀、最後の実戦～

明治10（1877）年の西南戦争は、日本初の銃火器主体の本格的な近代戦だったが、一方では日本刀が華々しく実戦で活躍した日本最後の戦いでもあった。

封建体制の上位にいた武士も、明治維新で士族となり、廃藩置県、身分制度廃止、徴兵令、秩禄処分さらに明治9年の廃刀令が追い打ちをかけ、職を失い、その存在意義すら失った。また、急激な西洋化で日本古来の伝統もただ古いものとして廃れ顧みられなくなり、武士の魂の日本刀までもが、無用の長物と化してしまった。

そこに日本最後の内戦、西南戦争が勃発する。維新の英傑、西郷隆盛率いる剽悍決死の鹿児島士族たちが、刀や銃器を携えて大挙上京しようとした。

戦いは数で勝る政府軍の小銃や大砲が威力を発揮するが、田原坂の戦いのはじめ頃は、近代装備では劣るとされた薩摩軍が優勢だった。それは、薩摩士族特有の斬り込み攻撃が大きな成果を上げたためである。これに対抗すべく、政府軍でも士族出身者の警視庁抜刀隊を結成、３月14日に田原坂は七本の最前線に投入して功を奏した。戦場では刀と刀が激しくぶつかり、戦況は一変した。

西南戦争でのわずか百人ほどの警視抜刀隊の活躍は、新聞や錦絵で多くの人々が知るところとなり、賞賛されて人々の記憶に残った。これを契機に戦争後には、特に警視庁では剣術の重要性が再認識され、奨励された。その猛き魂は現在に至るまで、受け継がれることになったのである。

西南戦争はもと武士である士族たちが、最後の華を咲かせた戦いである。しかし、伝家の宝刀を佩いて戦いながらも、無残にも折れ、曲った刀は容赦なく打ち捨てられていく。そこに、士族たちは自分自身の姿を重ねたのかもしれない。

士族が刀に込めた思いや心、刀から授かった力とはどのようなものだったのだろう。

河上 彦斎 Kawakami Gensai

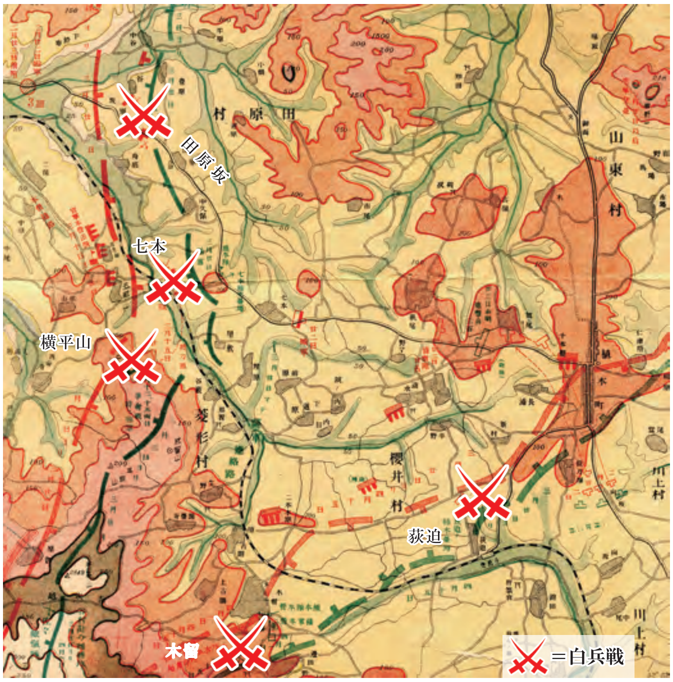
熊本市出身の攘夷志士。幕末四大人斬りの一人で、佐久間象山を斬った。漫画「るろうに剣心」のモデルの一人。剣のみならず和歌の素養も深く、文武に秀でた俊傑で大将の器と言われた。明治四年処刑、38歳。

皇国の風と武士の　其身を護る霊の
維新このかた廃れたる　日本刀の今更に
又世に出づる身の誉　敵も味方も諸共に
刃の下に死ぬべきぞ　大和魂ある者の
死ぬべき時は今なるぞ　人に後れて恥かくな
敵の亡ぶる夫迄は　進めや進め諸共に
玉ちる剣抜き連れて　死ぬる覚悟で進むべし

引用　外山正一他『新體詩抄』

▼田原坂の戦いから荻迫木留の戦いに至る戦闘状況図

戦線は田原坂陥落後に南に移動したが、政府軍は４月15日の薩摩軍撤退まで突破できず、熊本城と通じることはできなかった。



昨日、東野が死んだ。４月６日と８日の総攻撃にも耐えて元気だった。ついこの間、互いの無事を喜んだばかりだった。戦場では弟のように可愛がった。雄吾は初めて、自分の目に涙があふれていることに気がついた。東野孝之丞、日向庄内藩士族、享年16。　（画：樫木成香）

両軍の用刀

USED SWORD OF BOTH TROOPS

実戦では刀は消耗品である。日本刀は武士が闊歩した江戸時代には実際に使用されることは少なく、皮肉なことに武士の時代が終わる幕末維新期の戊辰戦争や西南戦争で多く実戦で使用された。

西南戦争の時、薩摩軍は皆家代々の刀を帯びていた。藤原刀、源刀、関刀、備州長船刀など様々であったが、中でも薩摩谷山郷で鍛刀された波平刀が多かったという。波平刀は堅くて軟らかい実戦向きの刀で、適当な振り具合と反り具合を備え、薩摩示現流の刀としても多く用いられたとされる。拵は薩摩拵で柄は太く長く牛皮で、鐔は小さい。

熊本諸隊の用刀は延寿刀、同田貫刀、侍鍛冶刀など熊本の刀を使用したと推定される。折れず曲がらず豪刀武用の同田貫は熊本城の御備え刀でもあった。拵は刀身も柄も短めで、柄は革巻き、肥後金工金具の肥後拵が多かったらしい。

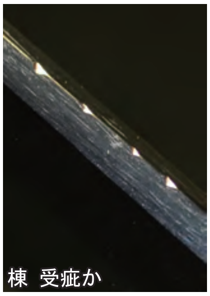
これに対する政府軍警視抜刀隊は田原坂近くの玉名、高瀬あたりから集められた刀で戦ったので、熊本諸隊と同様な刀を使用したと考えられる。これ以外の地域は薩摩軍の勢力下にあった。

田原坂では同郷異郷の士族同士が、波平vs同田貫、同田貫vs同田貫、延寿vs波平などの日本刀で、火花を散らしたことは想像に難くない。

引用参考文献　谷口休「薩摩私学校徒聞き語り（五）」他

刃長　一尺八寸二分一厘（五五・二㎝）
反り　四分九厘（一・五㎝）　目釘穴　壱個　室町時代
刃紋は細直刃。位、品ともに良い。薩摩軍使用の刀か。

◀刀　銘　波平□次作



棟　受疵か

銘

美少年伝 その一　高田（たかだ）露（あきら）

熊本協同隊士、時に歳二十三。身の丈やや低く、黒き瞳に色白の美少年。身に絹衣をまとい、踵が隠れるほど長く着、草履を履いて着物の裾をからげず、先祖伝来の宝刀を落し差しとし、悠々と先頭を歩く。それは、歌舞伎役者が舞台で国定忠次を演じているようであった。

薩摩軍の将士は、そのいでたちを見て女々しいと軽んじ、後ろから罵倒するものもいた。「こんなふぬけな奴を斬って、血祭いに上げ軍神に供えん」と言ったが、露はこれを聞いても意に介さず行進を続けた。

そして、植木向坂で乃木少佐率いる小倉連隊との距離、数十歩に近づくや、おもむろにその絹衣を脱ぐと、下には燃ゆるが如き緋縮緬の襦袢に、十文字の白襷。たちどころに大刀を振い、敵中に斬り入った。薩摩軍は勢いを得て、遂に政府軍を破った。

この時から露の武勇は、知られるようになった。菊池の舎営にいたとき、桜花爛漫、痛飲乱舞。時に露、朗々と吟じて曰く

快歌豪飲酔将狂　剣舞影寒二月霜
落月城頭花忽散　満身白雪鉄衣香

薩摩軍の将士はこれを聞き、協同隊に風流の士が多くいることを艶羨するばかりであったという。

『西南記傳　下巻二』

警視抜刀隊

"BATTOU-TAI" BY TOKYO POLICE DEPARTMENT

田原坂の戦いにおいて、士族を中心とした薩摩軍の抜刀攻撃により、政府軍では死傷者が続出した。事態を打開すべく、士族が多かった東京警視庁巡査の中から剣術に秀でた者で臨時に編成されたのが「抜刀隊」である。まさに「刃には刃を」である。

薩摩軍は田原坂近辺での対鎮台兵近接戦においては、斬込攻撃が有効であることを、早くに見抜いていたが、政府軍は対応が遅れ多くの損害を出した。

警察の業務は地域の警備警戒、治安維持、住民保護であり、戦争には参加しないのが本来の立場である。しかし、薩摩軍の抜刀白刃攻撃に徴兵の農工商出身者が多い政府軍鎮台兵は歯が立たず、斬り込まれると皆一目散に逃げ出したという。

警視隊はこの状況を見過ごさず、高い志と決死の覚悟で戦闘参加を何度も願い出た。そして、やっと認められ、東京警視庁巡査３００名の中から精鋭１００余名が抜刀隊として選抜された。抜刀隊の名付け親は参軍山縣有朋である。

警視抜刀隊は持ち物をすべて預け、ただ大刀一振を腰に帯びただけの軽装で、硝煙弾雨の戦場に勇進していった。時は明治10年3月14日、場所は田原七本の柿木台場、これが世に名高い警視抜刀隊の初陣である。

当初、抜刀隊の初攻撃は3月13日の予定だった。しかし、刀は県官の東奔西走にもかかわらず、玉名高瀬あたりでは住民が離散していたため、なかなか購求できなかった。１２０振が集まったものの、間に合わずに翌14日に日延べされた。

田原坂の激戦の最中、新式小銃や大砲では薩塁を抜けなかった政府軍も、警視抜刀隊が投入されたことで戦況は一変した。皆が賞賛し、普段は仲が悪い陸軍兵士も、この時ばかりは飲食を提供したという。

警視抜刀隊は翌15日の横平山の戦いの時に増員されたが、戦死者33名、負傷者50名、残りも軽傷を負い、ほぼ全滅状態であった。その凄まじさと戦いぶりは後々まで語り継がれ、多くの文学作品などに登場した。西南戦争全体を通じて、動員された警部や巡査の約４分の１にあたる２千人以上が死傷した。この比率は陸軍兵士と同じである。

警視隊は川路利良大警視を筆頭に鹿児島出身者が多く、同郷の士族同士が、また、戊辰戦争での旧敵元会津藩士も田原坂一帯で激しく刃を交えた。この時に「戊辰の復讐！」と叫んだといわれているが、真偽は定かではない。元会津藩家老の佐川官兵衛、元新撰組斉藤一こと藤田五郎も豊後口警視隊として西南戦争を戦い、佐川官兵衛は戦死した。

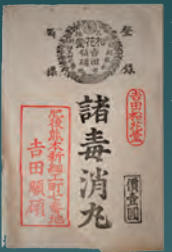
見過ごされがちな警察部隊の戦いぶりは各種の文献の他、各地に残る官軍墓地に静かにたたずむ墓石に刻まれている。

日本刀の威力

子供の頃から武芸の訓練をやっている薩摩の士族兵に、徴兵された後に初めて銃剣術を習っただけの鎮台兵は歯が立たなかっただろう。銃剣は数で押し出すしかないので、動作が素早く殺傷効果の大きい日本刀の強さは圧倒的だった。

両軍の士族たちには戊辰戦争で斬り合いを経験した者もいたが、白兵戦に慣れない鎮台兵は接戦になると逃げだす者が多かった。薩摩兵に日本刀で惨い斬られ方をした仲間を見ると、多くの鎮台兵は怖気づいたので、薩摩兵は積極的に接戦に持ち込もうとした。白兵戦で一撃でも加えられると鎮台兵は怯えてしまい、離れた位置から銃弾を浴びせるしかなかった。

日本大学教授
淺川道夫氏　談

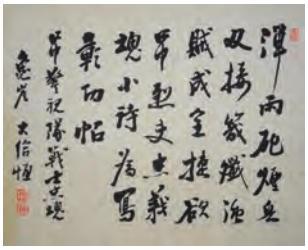


▶吉田松花堂 諸毒消丸 熊本市新町
西南戦争時、警視隊も使用した。基本的なデザインは江戸時代から同じ。藤田五郎も服用したかも。

警視抜刀隊警部だった田村（丹羽）五郎は、田原坂に散った戦友や負傷した者たちを想い、さらに、戦後の時代の中で忘れ去られようとしていることを憂えて、七回忌にあたる明治16年（１８８３）年、各界名士に抜刀隊の偉功を称える漢詩和歌などの揮毫を募り、「彰功帖」全１０３葉を発行した。左はその一部である。

▼錦絵　賊徒之女隊勇戦之図

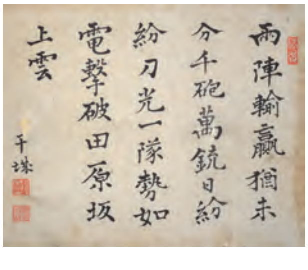
▼彰功帖



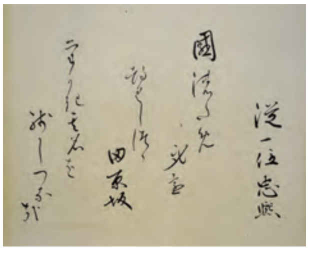
▲大給 恒

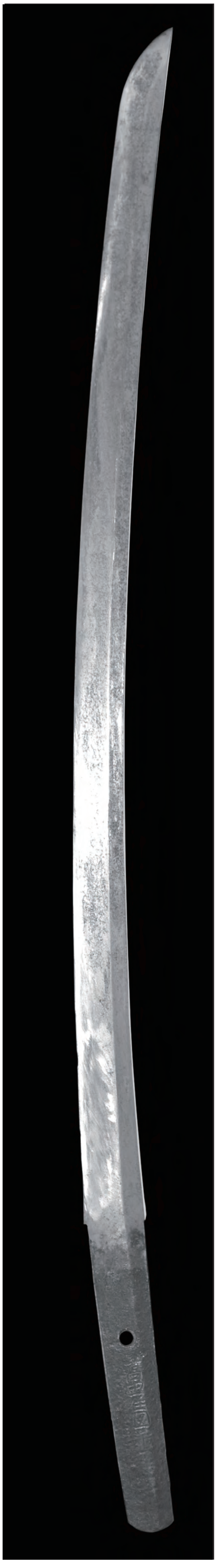
▲三條 實美

▼谷 干城



▼近衛 忠熙





◀刀　銘　高田住國重　室町時代　刃長一尺七寸七分（五三・八センチ）

◀刀　銘　國俊　江戸時代　刃長一尺七寸八分二厘（五四・〇センチ）

◀刀　銘（表）筑後住祐利（裏）殉國□□明治二年二月日　明治時代　刃長一尺九寸八分三厘（六〇・一センチ）

◀槍　銘　同田貫賢次　室町時代　刃長九寸四分（二八・五センチ）

日本刀

JAPANESE SWORD

日本刀の戦い

間合いは一般的には刃先と刃先が触れ合う距離と言われるが、実戦では怖いので数歩程度離れて威嚇し合い、隙を伺った。気力負けした方が負ける。

短い刀は片手で半身に構え、リーチを伸ばせるという利点もあった。刀は短いから駄目ではなく、短いものを長く、長いものを短く使う。斬り付ける際には左足を半歩踏み出して振りかぶり、次の一歩で踏み込む。斬り付けた瞬間に体重がかからないと切れないので、竹刀剣道のように軽く飛び込んだりはしない。

真上からでも斜めからでも、必ず剣先が弧を描くように斬り付け、物打（刀身の先端三分の一位のところ）で斬らないと切れない。剣先から斬り込まずに、相手の着物の表面で刀が滑ってしまうと、着物しか切れない。

西南戦争の時は両軍の士族は、刀を使い慣れていたので、刃が欠けるような戦い方はあまりしなかったと思われる。

日本刀の防御

相手の刀を受ける際は、右手で頭上に持った刀身を左腕に託す形をとり、半身で相手の斬撃を体ごと抑える。身を捨てて守る。受けた瞬間、相手の刀を滑らせれば、そのまま反撃に入ることができる。刀を体から離して相手の斬撃を受けようとすると、そのまま圧し斬られる。

囲まれた際は、壁や木を背にすると、相手の刀が勢い余って壁に当たるので防御になる。刃と刃でガチャガチャ斬り合うと一度で刀が使えなくなるので、相手の刀を避ける際は鎬や棟で受ける。

日本刀の切れ味

日本刀で斬られると、手足の指などは簡単に落ち、顔面を横薙ぎに斬られると、上下に泣き別れて半分になる（提灯お化け状態）。甲冑の類当は、斬撃から顔面を護るための防具。顔の正面を斬られれば鼻や口唇が落ちる。上手く斬れば脳天から顔の真ん中、鼻あたりまで相当深くまで刃が入る（実際の刀傷については、陸上自衛隊の彰古館所蔵の「明治九年神風黨暴動時刀創圖」を参照されたい）。

骨は堅木や鉄と違って水分があるので、技量のある人なら容易に斬り落とせる。枯竹は堅くて斬りにくいので、斬りかかられた時、咄嗟に火吹竹や竹箒の柄で刀を抑えることも、あながち不可能ではない。

日本大学教授　淺川道夫氏　談

刀にまつわる言葉 ―刀装具編―

切羽詰まる（せっぱつまる）

鐔の表と裏にあり、刀身、鐔、柄をしっかりとおさえて動かなくするものが切羽。物事が差し迫り、窮地に追い込まれ身動きできない土壇場になることをいう。他に「切羽脛金（せっぱはばき）」―抜き差しならぬ談判の意―がある。

鎬を削る（しのぎをけずる）

鎬は刀身の最も厚みのある部分で、鎬地と平地の境の稜線。斬り合いでは刃と刃は合わせず鎬で受ける。互いの鎬が強く当たって擦れ、削れるようになることから、激しく争うの意味になった。

鐔迫り合い（つばぜりあい）

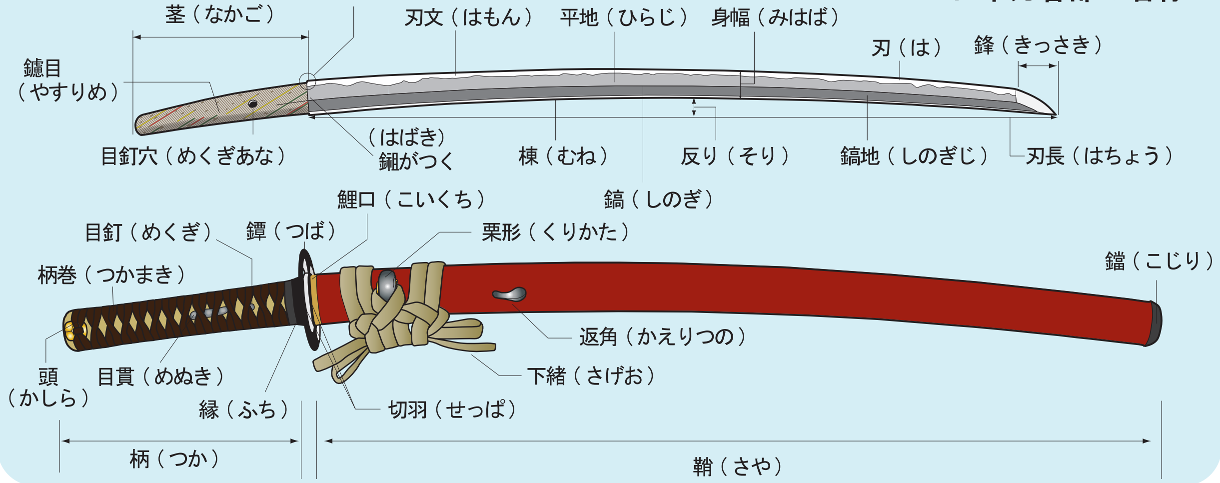
鐔は柄を握る手を防護するもの。斬り合いでお互いが打ち込んだ刀を鐔で受け、鐔と鐔がせりあったまま、押し合うことから、互いに激しくせりあうことの意味になった。他に「鐔際（つばぎわ）」―瀬戸際の意―などがある。

鞘当て（さやあて）

武士がすれ違った時に、互いの刀の鐺が当たったのをとがめ立てすること。そこから、意地の張り合いでの喧嘩をいうようになった。「恋の鞘当て」など。

他に土壇場、快刀乱麻、単刀直入、真剣勝負、抜き打ち、懐刀、諸刃の剣などなど、刀にまつわる言葉はたくさんあります。　参考『広辞苑』

日本刀各部の名称



軍刀

A SABER

1 **明治19年制軍刀**　刀身に日本刀（模造）を仕込んである。

2 **明治８年制騎砲工輜重科下士兵卒軍刀**　刀身はドイツゾーリンゲン社製。鍔頭は鉄製無章、柄は革、柄糸は真鍮。指貫を欠く。本来は２環式。

3 **明治８年制歩兵科尉官軍刀**　軍刀の柄は将官は鼈甲、佐官と尉官は水牛角。鍔に櫻唐草、目釘部分にも櫻花。柄糸は金線一条、２環式。参謀科の柄は白色。

4 **突兵拵**　幕末に流行した肥後拵を基にした洋風の初期軍刀拵。２環式。柄巻は鹿革に薄漆、目貫金具の代わりに柄巻の革紐を捻じる。鐺が特徴。

美少年伝　その二　高橋　長次

熊本隊士、歳十六。三月十五日、田原で皆に先立ち進んで刀を振るって奮戦。しかし、弾丸に当たって斃れた。佐々友房は能勢運雄と共に長次を台場に戻したが、その傷は額上に刀創で顔は血まみれ、銃弾は胸部を穿ち、ほとんど背中に達しようとする深手であった。

ようやく目を開け、あたりを見て長次は、「閣下は隊長ではありませんか。私は、まだ充分な働きをしないうちに、こんなことになってしまいました。その上、過って刀を敵地に落としてきました。刀を失って何の面目があって、この世にいられましょう」と、這って敵地に行こうとした。

佐々が「どこに行くのか」と聞くと、長次は「刀を取りに」と答えた。

佐々は、「君の志は盛んである。しかし、その身でどうやって行くつもりか。刀はわしがすぐに取ってきて、君に渡そう」と、偽って病院へ送ろうとするが聞かず、長次は、「わたしは、刀を見るまでは一歩もここを動きません」と、弾が飛び交う下に正座して動こうとしない。

佐々たちは、ようやく長次をなだめ、植木病院に送る途中、遂に死んだ。皆、少年なのにこの勇敢な志を惜しまない者はいなかった。

『戦袍日記全』古閑俊雄

西南戦争　戦場逸話

横平山の戦い

横平山は、どうしても落ちなかったが、警視抜刀隊が来てから有利になり、夜明けに双方から斬り結ぶのが見え、朝日が出るとキラキラ光って、まあ美しかった。

『十年の戦争　こぼれ話』

薩摩の抜刀攻撃

白兵戦になると薩摩軍が優勢で、示現流独特の甲高い声を発して突撃すると、政府軍兵は、その声を聞いただけで逃げ散ったと伝えられている。

『歴史への招待　西南の役と玉東町』

日本刀と銃剣

薩摩兵は左手で銃剣をつかみ、右手で白刃を閃めかして片手なぐりに斬り込む。政府軍兵は戦死傷があまりに多かったので、後には銃剣を研いだ。そのことを知らぬ薩摩兵は斬り込みに来て、いつもの通りに銃剣をつかんだ。そこで強く後へ引く。これでは堪らない。五指がバラバラ落ちたという。

『西南戦場逸話』

硫酸で刀を研ぐ

熊本城の重囲が解けると両軍の接戦は頻繁になり、銃撃戦は少なくなったが刀は研ぐことが多くなった。時間もないのでなかなか研ぐことができない。

政府軍の一将校が試しに硫酸を以て砥石に代えてみた。硫酸はよく鉄を腐食するものなので、これを使えばすぐに研ぐのと同じことになる。軍中では奇なりと叫び、これ以降、皆これにならって砥石の代わりに硫酸を用いたという。

『西南戦場逸話補遺』

年刊 田原坂 2017年[Vol.3] 田原坂西南戦争資料館展示案内

壁に残る弾痕の数々（復元）

内部の展示

三ノ岳、半高山、吉次峠の遠望

展望デッキ　木葉山を望む

弾痕の家（復元）全景

企画展示

別館　弾痕の家

利用案内

■開館時間　9:00～17:00（入館は16:30まで）　■休館日　12月29日から翌年1月3日まで

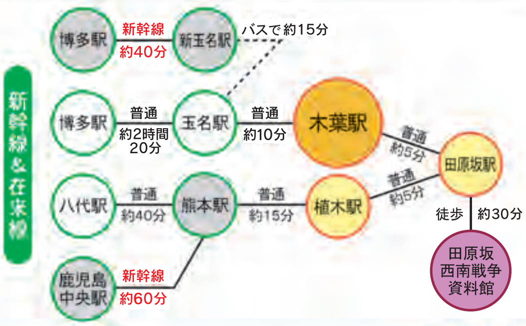
■入館料

一般（高校生以上）	個人300円	団体（20名以上）240円
小・中学生	個人100円	団体（20名以上）80円

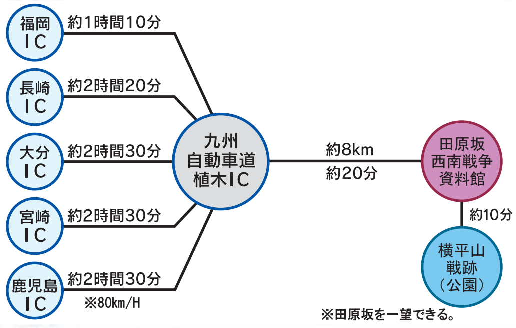
ただし乳幼児、障害者手帳をお持ちの方、熊本市・鹿児島市・福岡市・北九州市に居住する65歳以上の方（証明できるものを提示）と同市内の小・中学生（名札か生徒手帳提示）等の入場は無料です。

交通案内　2022年7月訂正

JRをご利用の場合



自動車をご利用の場合



お問い合わせ

熊本市文化財課植木分室
〒861-0195 熊本市北区植木町岩野238番地1
☎096-272-0551

熊本市田原坂西南戦争資料館
〒861-0163 熊本市北区植木町豊岡858番地1
☎096-272-4982

発行 熊本市文化振興課

雑誌1877-03　定価0円

1002190924
030420